

あこがれの洋風生活

桑園博士町

欧米の生活スタイルが一世を風靡ふうびした大正時代。北海道帝大の教授たちを中心に、札幌の「文化」をリードした人々が集まり住んだ「桑園博士町」を紹介します。

大正七年（一九一八年）、札幌農学校が東北帝大農科大学を経て北海道帝大に昇格し、新設された学部
に洋行帰りの若手教授たちが続々と着任しました。

彼らは札幌に赴任して間もなく自邸の建設に取り
かかり、そこで自ら欧米で体験してきた洋風生活を
実践しました。彼らを中心とする住宅地が所々でつ
くられ、それらはあこがれをもって「大学村」と呼
ばれていました。その中で、農学部教授を中心とし
てつくられたのが「桑園博士町」です。「桑園博士
町」は現在の北六西一二付近にあり、もともとは大
学農場の少し湿地めいた牧草地だったのが、明治四
十二年（一九〇九年）に宅地になったものです。そ
の博士町に居を構えたのは、世界的植物学者で元北



「宮部記念館」としてつかわれていたころの宮部金吾邸
(北海道大学付属図書館北方資料室所蔵)

大植物園長の宮部金吾みやべきんごを始め、納豆博士と呼ばれた
細菌学者の半沢洵はんざくじゆん、第三代北大総長を務めた高岡熊
雄たかおかくまなど、当時の札幌の文化人を代表するそうそうた
る顔ぶれでした。

このころは、欧米の生活改革思想が日本人のライ
フスタイルに大きな影響を与えた時代で、目新しい
ガス器具や電気器具など生活を便利にする商品が脚

光を浴び、家事の合理化、能率化が進められました。このような近代的な欧米文化を取り入れた生活は「文化生活」と呼ばれ、電気・水道・ガスなどを備えた洋風のモダンな住宅「文化住宅」とともに、多くの人の夢を誘いました。

博士町の教授たちの住まいにもその影響が見ら



村会に集まった教授たち（昭和10年撮影）
（北海道大学付属図書館北方資料室所蔵）

れ、高岡教授の自邸には、サンルームや丸型ペチカ（ロシア風の暖炉）を備えた書斎や居間などがありました。同じく博士町の一角を占めていた帯広蓄大学長の宮脇富邸^{みやわきとみ}では、アメリカから輸入した成型機で造ったコンクリートブロックを外壁に使い、石炭ボイラーを利用した温水暖房や、様式の水洗トイレなど、最新の設備が整っていました。

また、近くには、流行の最先端をいく教授たちの好みに合わせたのか、当時ではまだ珍しかったビールやワイン、ベーコンなどを扱う店もあつたそうです。

このように、桑園の教授たちは、豊かなコミュニケーションと住環境をつくり上げ、「文化生活」を満喫していました。現在も、当時の教授たちの住宅が二軒ほど残っており、「文化」という言葉が人々を夢中にさせた時代をしのばせます。

（平成十二年八月号・第七十回）